

灼熱の地を開く

アフリカ支援の山陰人

貧困や環境破壊、感染症の流行。アフリカを取り巻く厳しい現状は、世界が抱える問題の縮図だ。救済が叫ばれる中、日本の途上国支援はアジア重視からアフリカへの比重を強め、来年五月には横浜市でアフリカ開発会議が開催される。山陰両県出身者にも、途上国への技術支援を担うJICA（国際協力機構）の青年海外協力隊員や専門家として、アフリカの発展に挑む人たちがいる。一万人以上も離れた炎熱の地で奮闘する姿を訪ねた。

（本社報道部・佐野卓矢）

40度に迫る猛暑

ユニターシステムの開発技術に自信が芽生えたときに偶然、目に留まったのが青年海外協力隊員の募集だった。業務内容が、医療用品の物流を管理するコンシューマーシステム構築

ンジャロや世界遺産があるザンジバル島がある観光国。一方で一人当たりの国内総生産（GDP）は三百台と、貧困は深刻な問題だ。見聞さんがアフリカに一面が見えてきたとい

ア全土に供給する専門機関。成人のエイズ感染率、乳児死亡率とも6%を超える同国は、医療環境の改善が必須の課題になっている。地方に医薬品が十分に

慣れぬ環境1カ月で7キロ減

なスワヒリ語であいさつという「自分のための」を交わす。益田市出身のシステムエンジニア見国祐也さん(29)は、青年海外協力隊員として赴任したタンザニアでの暮らし、三月には日本を後にしが九カ月。すっかり現地に溶け込んでいた。タンザニアは、インド

高層ビルが建つ市の中心部には、日本車が列をつくり、携帯電話を手にした若者やビジネスマンがあふれる。都市の活気に驚く一方で、ポリオ

慣れない環境から、最初の1カ月で七キロ減った。夜は扇風機が手放せない状態、悩まされたのは頻発する停電。「夜中起きると汗びっしょりが、しばしばだった。厳しい生活環境でも救いはあった。あいさつする」と「ジャンボ（こんにちわ）」と笑顔で返すフレンドリーな人々。あいさつには、物ごいも金持ちも分け隔てがない。好感が持てたという。協力隊員として働く先



インド洋に面したタンザニアの首都ダルエスサラーム。港にある魚市場は市民の活気に満ちている

国際協力機構（JICA）外務省所管の独立行政法人で、開発途上国への技術協力を担う。医療、教育、インフラ整備などさまざまな分野で、専門家やボランティアを160カ国に派遣。ボランティアの青年海外協力隊員は現在4000人が派遣され、このうち島根県出身者は27人、鳥取県出身者は11人。

総合

Sanin Sougon

山陰ワイド